「七夕の日に」

中学二年　Ｈ・Ｆ

プロローグ

その日は前日までの梅雨空が嘘だったかのように晴れていて、汗がたらたらと流れ出すような暑い日だった。

「星汰、急がないとこのみちゃんが来ちゃうわよ、早く朝ごはん食べちゃいなさい」

…そう急かすのは母。星汰は、僕の名前だ。

「わかってるよ！　でもこのみもまだ朝ごはん食べてる頃で、まだ来ないはず…」

ピンポーン

『せーーーーたー君っ！』

母への反論をし終わらないうちに、インターホンの音と共に僕の名前を呼ぶ声が聞こえた。このみだ。いつもより、来るのが早い。

「はぁーい！」

僕は前日から用意してあった、誕生日に買ってもらった天体観測用の双眼鏡の入ったお出掛けバックを引っ掴んで表に飛び出した。

「いってきまぁーす！」

「おばさん、いってきまーす！」

僕とこのみの声が重なる。

そう、その日は七夕で、僕とこのみは家の近くにある『山』で、天の川を見ようと約束をしていたのだ。

僕たちが『山』と呼ぶものは実際は山ではなく丘くらいの高さのもので、町の端から端まで見渡すことができる知る人ぞ知る隠れスポットである。そして、この『山』は星を観察するのにも絶好の場所なのだ。

このみは僕の幼なじみ。前はすごく仲が良くて、何をするでも一緒だった。

…この時も。

「やっとついたー！」

当時まだランドセルが大きく感じるくらいだった僕たちにとって、『山』の頂上までの道はかなりきついものであった。汗だくになりながら登りきった喜びと達成感で、顔にぱっと笑顔が宿る。

まだ星が出るまで時間があった。僕とこのみは、歩き疲れたことを忘れ、鬼ごっこやかくれんぼに夢中になって長い時間遊び続けた。遊びをやめた頃にはあたりは暗くなっていたので、僕たちは空を見上げた。

「うわぁぁ綺麗。天の川が良く見えるよ！！！」

用意してきた双眼鏡をのぞき込みながら、僕ははしゃいで言う。

「あれが夏の大三角で、三角形の上の方にある他よりも明るく光っているのが琴座のベガ。ベガが織姫で、その下にあるのがわし座のアルタイル、それが彦星で、織姫と彦星のあいだを流れるのが天の川で…」

このみは僕の説明を聞いてない様子。僕の横に座って、ただただうっとりとして空を眺めている。

当時の僕たちにとって、その天の川はいままで見た星空の中で一番美しいものであり、その美しさに僕とこのみはすっかり魅了されてしまったのだ。

僕たちはその場からしばらく動けず、気付いたころには帰る時間をとっくに過ぎていたので、慌てて家に帰った。それぞれあの綺麗な星空を胸に焼き付けて。

…と、これは八年も前の話。

1.

「星汰、ご飯よーっ」

下の階からそう呼ぶのは、母だ。

「…はぁい」

僕は寝癖でぴょこぴょことはねてしまった髪の毛を手で押さえつけながら、下の階に降りていく。

朝食の席には、もう祖母と父がついていた。

「おはよう」
なんとなく声をかけて僕も席につく。
卵をぱかっと割って、納豆と一緒にかき混ぜる。それをご飯の上に流し込み、醤油を二、三滴。
いつもの「セータ特製スタミナ丼」をもそもそと食べながら、祖母と父の話に聞き耳を立てる。
「今日は七夕だけど、雨で天の川見えそうにないなぁ」
「そうだねぇ。七夕はちょうど梅雨時で、天の川はなかなか見れるもんじゃないからね。また来年に期待かねぇ」
大人二人で天の川の話をしている光景はなかなか珍しいと思いつつ、適当についているＴＶのニュース番組の特集をぼーっと眺めた。
「今日は七夕です！　幼稚園生の皆さんは、短冊にどんな願い事を書いているのでしょうか！　〇〇幼稚園に取材に行ってみました！」
リポーターの耳に障るような甲高い声に始まり、幼稚園生がそれぞれ願い事を書いた短冊を持って走りよってくる。
「まさとくんとけっこんしたいな」
一人の幼稚園生が、恥ずかしそうにそんな短冊をテレビカメラに向ける。
…僕も昔はこのみと結婚したいとか短冊に書いたっけ…ふと頭にこのみの顔が浮かぶ。このみ。昔はあんなに仲が良かったのに、今はすっかり話さなくなってしまった。幼なじみの関係なんて、儚いものだ。
八年前の今日、このみと一緒に天の川を見に行った。その日は本当によく晴れていて、天の川は綺麗だった…
「久しぶりに『山』にでも行ってみるかな」
そうポツリとつぶやくと、さっきまで二人で話をしていた父と祖母が星汰の方を振り向いた。
「やめとけよ、どうせ行ったって今日は天の川なんて見られないぞ」
「いや、わかってるけど、なんとなく行ってみようと思って」

…天の川を今日見ることができないことくらいわかっている。でも僕は、なんとなくあの『山』を久しぶりに訪れてみたい衝動に駆られた。

そうこうしているうちに、家を出る時間になった。僕は鞄の中にそっと昔使った双眼鏡を忍び込ませて、傘をさしながら小走りで学校に向かった。

2.

あーぁ、毎日雨でやんなっちゃうな。

底がすり減ってきたローファーで水たまりをぴちゃぴちゃと踏みながら、私は重い足取りで学校へ向かう。今日は七夕。本当だったら『山』に久しぶりに行って天の川を眺めようと思ったのに、こんな生憎の雨じゃあ天の川なんて見えるはずもない。

ついこの前中学生になったばかりだというのに、あっという間に時は流れて私たちは中学二年生になっていた。

ドンっ。

傘に、何かがぶつかるような感触がしたと思ったら、いつの間にか横に同じクラスの千鶴が立っていた。

「おっはよーこのみ。どしたの？　元気ないよ？」

「おはよー千鶴。ただ雨でやだなーって思ってただけ。千鶴は今日も元気だね」

私がそう言うと、千鶴はくりっとした大きな目をパチクリさせた。その度に、長いまつげがぱさぱさと上下する。

「あはは。元気なことだけが取り柄だからね！」

私たちはぺちゃくちゃ話をしながら歩いていき、気づけば学校に着いていた。

「おはよーこのみ、千鶴！」

教室に入るともう既にほとんどの生徒が教室の中にいて、一部の子が挨拶をしてくれた。

なんとなく挨拶を返して自分の席に着いたと同時に、担任の先生が教室に入ってきた。散り散りになっていた生徒たちがのろのろと自分の席に戻る。

「えー、朝礼を、始めます。ボクからの連絡はー…特にないですね。まぁ、ボクの七夕の願い事が、『君たちが定期テストでいい点をとってくれますように』だってことくらいですかね。ってことで頑張ってくださいよ。星に願ってますからね」

先生の言う事に、くすくすと笑いが起きる。みんなにつられて、私も少し笑ってしまう。と同時に、星…星汰の顔が思い浮かぶ。

星汰とは幼なじみで、昔はよく遊んだ。すごく仲が良くて、いつも一緒にいたし、将来は星汰と結婚しようかなとも思っていたくらいだった。

小学校5年生あたりまで、仲が良かった。途中からクラスが変わってしまい、今も同じ中学ではあるものの違うクラスで、廊下でたまたますれ違ってもお互い下を向いて通り過ぎるだけだし、もう喋ったりすることもなくなった。

だが、別に喧嘩したわけでも、仲違いをしたわけでもないのだ。自然に、お互い心が離れていってしまった。そんな感じだと思う。

幼なじみなんてそんなものなんだと思ってしまえば終わりだが、それだけで片付けてしまうのはなぜだか少し寂しい気もする。

前はよく、星汰に連れられて二人で『山』に行った。遊び目的で行くこともあったが、大抵は星を見るために行き、星を指さしては星汰が一生懸命説明してくれた。そして、二人で時間を忘れて星空を眺めるのだ…八年前の今日も、そうだった。生まれて初めて見た、夜空に横たわるようなきらめく天の川…あの光景を忘れたことなんて一度もない。

そうだ。やっぱり今日、『山』へ行ってみよう。天の川が見えなくても、星が見えなくても。八年前のあの星空を、思い出を、振り返るために。

私は先生の話をぼんやりと聞きながら、そう心に決めた。

3.

久しぶりに来た、『山』。

昔は息を切らして登っていたこの坂も、今ではもう普通に登れてしまう。

今朝からしとしとと降り続いていた雨は、帰ってくる頃にはもう止んでいた。

頂上から見た景色は曇っているというのに今も昔も変わらずきれいで、薄暗くなり始めた空の下に、三角の屋根がぽつぽつと並んでいる。

昔はここにこのみと二人でよく来たなぁ。ここから見る景色はずっと変わらないのに、僕たちの関係は変わってしまったんだなぁ。そう考えて、また、このみの顔が頭に浮かぶ。

今日はやたらとこのみのことを考えてしまう。それは今日が七夕だからだろうか。それとも、あの日このみと見たあの天の川の美しさが忘れられないからだろうか…

あの八年前の七夕以降、七月七日は毎年雨で、天の川を見ることはできなかった。

そりゃあそうだ。七月のはじめ頃なんてまだ梅雨の真っ只中で、奇跡的に晴れたとしても月が出ていれば、天の川は月の光に負けてしまい肉眼では見ることができないのだ。

次はいつ見ることが出来るだろうか…僕が大人になってからか？そんなことを考えているうちに、いつの間にかだいぶ時間が経ち、空は暗くなっていた。が、星は一つも見えない。

…まぁそんなのわかりきっていたことだ。そろそろ帰ろう。

そう思って鞄を掴もうとしたとき、

「星汰！！？」

後ろから大きな声がした。

懐かしいような、聞き覚えのあるような声…僕が振り向くと、驚いた顔でこちらを見つめる姿があった。
「このみ…！」
―なんでここにこのみがいるんだ？偶然このみもここに来ただけなのか？いや、そういえば話すのは久しぶりだから何を話していいかわからない…
僕の思考回路はこのみがこの場所に現れたという現実が受け入れられずにショートしてしまったようだ。次の言葉が出て来ず、沈黙の時が流れる。
「星汰、今日は天の川、見えないはずだよね…？」
沈黙に耐えかねたようにこのみが僕に問いかける。僕の頭の中はまだぐしゃぐしゃで、適当に「うん…」と答えるくらいしか出来なかった。また沈黙の時が流れる。
「ねぇ…もしかして星汰もあの時見た天の川が忘れられなくて、今日ここに来たの？」
ようやく目の前の現実を受け入れることができた僕は、今度は適当ではなく心から「うん」と頷いた。
「だよね、久しぶりだもんね。私も今日は天の川なんて見えるはずないと思ったけど、あの日見た星空が…星汰と見た星空が忘れられなくて、来ちゃった」
このみはそう言いながら恥ずかしそうに下を向く。僕と全く考えていたことが同じだ。このみも八年前のあの星空を忘れていなかった。そう思うと嬉しくて、なんとなく恥ずかしくて、僕も下を向いてしまう。
このみは再び僕の顔を見てから、目線を上にずらして空を眺めた。鼻の先っぽを天に向けたままこのみは言った。
「やっぱり、星は一つもないね。わかってはいたけど。本当だったら今日は天の川がみえたかもしれないのにね」
「星、雲の切れ目に一つぐらいあるかもよ」

…僕は咄嗟にそう言ってしまった。このままこのみがいうことに相槌を打っているだけでは、目の前からこのみが消えてしまうような、それと同時にこのみと見た「あの」景色も僕たちの記憶から消えてしまうような気がした。

「ほんと？　…じゃあ、どっちが先に見つけられるか競争ね！　よーい。スタート！」

このみは始め驚いた顔をしていたが、笑顔でそう言って、だーっと僕のそばに駆け寄りすっと腰を下ろした。そして、上を向いて空をぐるりと眺める。

この無邪気なところ、やっぱりこのみだ。時が、まだ幼かった頃に戻ったように感じた嬉しさに、僕は頬を軽く膨らませながら空を見た。

…自分から言い出した割には、空全体にどんよりと雲がかかっていて、星なんか一つもある気がしない。半分諦めながら、すっと双眼鏡を出して空を見回すと、弱く光る星がひとつ、雲の切れ間からちろりと顔を出していた。

「…あった！」

僕が星を指さすと、

このみは「嘘、どこー？　星汰早すぎ」と言って僕が指をさす先をじっと眺めた。

「えー、星なんて一つもないけど…なんでかなー？」

「すごく弱い光の星だから、まだこのみは目が暗闇に慣れてなくて見えないんだよ。しばらく経てば見えるようになると思う」

不思議そうに目をこするこのみにそう説明すると、「じゃあ見えるようになるまで、もうちょっと待ってようかな。」という答えが返ってきたので、僕はそれに付き合うことにした。

このみと二人でこうやって並んで腰掛けていると、何だか昔を思い出す。でも今はお互い中学生で、もう昔のように仲良く遊んだりすることはできないわけで…そう考えると、「ねえ、なんで僕たちは話さなくなったんだと思う？」

と聞かずにはいられなくなった。
僕のおかしな質問に、このみはしばらく考えてから、
「私たちも、大人になったってことなんじゃないかな。クラスが別れたことがきっかけでだいぶ疎遠になって、そのままもう一度元の関係に戻ることは難しいくらい自分たちがどんどん成長してしまった。でも今日ここで、同じ目的でまた会うことができたんだから、まだ私たちは心のどこかでお互いのことを想っている、繋がってるっていうことなんだと思うよ」
と答えた。
確かに、僕はこのみのことが、このみと過ごした時間のことが、そして、八年前の今日、このみと見たあの星空が忘れられなかったから今日ここに来た。それはこのみも同じだったということなのか…嬉しくもあるが、照れくさい。僕はそんな自分の気持ちをなんと伝えていいかわからず、「確かに…」と返答することしか出来なかった。

僕たちはまた前のように並んで空を見ていたが、しばらくするとこのみが「あっ」と声をあげた。
「見えた！　星が出てる！」
このみの目にはようやく、ぼんやりと弱々しく光る星が映ったのだ。
「でも星汰のほうが先に見えたから、この競争は星汰の勝ちだね！」
このみは無邪気に笑っていう。
「そうだな。僕の勝ち。じゃあアイス奢ってよ」
「やだねーっ。こんな時間にアイスなんか食べたら太るよー！」
僕はこのみと笑いながらしばらく会話を楽しんだ後、「じゃあそろそろ帰ろうか」と立ち上がり、家へと坂を下りだして、このみもそのあとに続いた。

今日は七月七日だ。八年前のあの天の川に比べればぜんぜんちっぽけな星だったが、八年ぶりにこのみと二人で、七夕の夜に星を見ることができた。

4.

「お帰りなさい、このみ。遅かったじゃない。ご飯できてるから早く食べちゃいなさい」

家のドアを開けると、母がいかにも心配していた、というような顔でこちらを振り向いた。

「ただいま。遅くなってごめん。手を洗ったらご飯、食べるね」

普段なら、こんな時間に帰ってきたらこっぴどく叱られるに決まっている。だが、今日は学校から帰ってくるなり「久しぶりに『山』に行って星をみたいから、帰りが遅くなるかも」と母に頼み、母も「今日行ったって星が見えるはずないと思うけど…」と言いつつもしぶしぶ承諾してくれたので、怒られるということはなかった。『山』は私だけでなく、母にとっても特別らしい。

用意された夕食を食べ終えると、自分の部屋に行き、ベッドに飛び込んだ。星汰と久しぶりに話したからなのか、興奮がまだ覚めない。

あの景色のことが忘れられなかったのは私だけだと思っていた…今までは。でもそれは星汰も同じだったのだ。そう考えると嬉しくてたまらなくて、ベッドの上においてある大きなうさぎのぬいぐるみ、うさぴょん—これは姉が勝手につけた名前だ—をぎゅっと抱きしめた。

「このみー、入るよ」

ドアの開く音と共に、うさぴょんの名付け親の姉が部屋に入ってきた。

「このみー、ちょっといいかな…あー！　うさぴょん！　そんなに強く抱きしめたら潰れちゃうじゃん！」

「ごめんごめん。で、何の用なの？」

「あー。電子辞書学校に置いてきちゃったから、このみに借りようと思って。持ってる？」
「あーあるよ、確か鞄の中に…あった！　はい。明日使うかもしれないから返してね」
　電子辞書を手渡すと、姉はありがとうと私にひと声かけてから、不思議そうな顔でこのみを見た。
「…どうしたのこのみ。なんか嬉しそうね。何かいいことでもあった？　あっ。ひょっとして、彼氏できたとか？！」
　姉の推理は見当違いだが、いい事があったのは間違いではない。
「全然。彼氏なんて出来てないもん」
「あっ！　じゃあ、星汰くんだ！」
…図星だ。カンが鋭い姉に、私は今日あった出来事を全部話すことにした。
「…でね、『山』に行ったら星汰がいたの。誰もいないと思っていたから本当にびっくりしたけど、その後話してみたら、私と考えてることが同じだったから、驚いた」
「考えてることって？」
　姉が聞き返す。
「…えっと、八年前に一緒に見た天の川が忘れられなくて『山』に行こうと思ったってこと」
「じゃあこのみも星汰君との思い出が忘れられなかったんだ」
「…うん」
　姉は私の話を聞き終わると、少しにやついてから、こんなことを言った。
「すごいね。お互いのことが忘れられなかったんだ。あんたたち、本当に織姫と彦星みたいだね」
「えっ？！」
　姉の言うことに、思わず大声をあげてしまった。

「だって、七夕に、お互いのことを想って再会する…あんたちの場合、会ったのは偶然だけど、七夕の夜だからこそ起こる何かがあったんだと思う。いいなぁー、私もそんな幼なじみが欲しいーっ！」

…確かにそうかもしれない。お互いのことを恋愛対象として見てはいなかったが、姉に言われるとなんだか本当に自分が織姫のような境遇に立たされたような気がしてきた。

電子辞書を持って出て行った姉の背中に向かって「私が織姫か…」と呟くと、なんだか恥ずかしいような気持ちになって、照れ隠しに私はもう一度うさぴょんを強く抱きしめた。

5.

二人で八年ぶりに星を見た七夕のあの日から季節は巡り、春がやってきた。僕は中学三年生になり新学期が始まった。

新学期が始まったといっても、うちの学校はクラス替えがないので、新しくフレッシュな気分で頑張ろう、という考えが生まれるはずもなく、四月に入ってから早二週間、すでにいつものだらけ癖が発動しているのは言うまでもない。いつもと変わらぬ毎日の繰り返しで、いい加減飽きてきたところだ。

だが、今日は何かが違った。 朝ご飯に僕を呼ぶ母親の声が、なんとなく甲高く、よそよそしい気がする。もっとも、特に意識しなければなんということもないことなのだが。

だが、その微妙な異変はその後になっても続いた。 朝食を食べる時に、父と祖母がなにやら小さな声でヒソヒソと話していると思えば、僕が入ってきた瞬間口をつぐみ、「なんの話？」と聞けば焦って「なんでもない。それより星汰、宿題やったか？」と話題をそらしたり、深夜、トイレに起きると、

「……だから…で、やむを得ないんだ…」

「でも……そしたら星汰が…で…」

と母、父、祖母の３人が声をひそめて話しているのがリビングから聞こえたりなど、何度もそのようなことがあった。

何かがおかしい。僕だけ仲間はずれにされているような気がする。
あまり気分は良くなかったが、大人の事情に子供が首を突っ込むのは良くない、と気にしないことにした。
・・・
そんな大人達の態度が一週間くらい続いた頃、ついに謎が解明される時がやってきた。
夕食を食べ終えて部屋に戻ろうとしたところ、「大事な話があるから。」と父に呼び止められた。
もう一度テーブルに付き直すと、母、祖母も僕に続いて席につき、「遂に来た。」というような決心した顔で父の方を見ていた。
しばらく沈黙が続き、ようやく父が口を開いた。
「…星汰。お前には辛いことかもしれないが、私たちはお前が高校生になるのを待って、もっと都心の街に引っ越すことになった。」
「…えっ？！　えっ…はっ？！」
驚きのあまり立ち上がってしまった。…引っ越す？？　友達はどうなる？　高校は？　『山』は？　…このみは？？
父は、まぁそうなるのも無理はないという様子でこちらを見ていた。
「あのね、お父さんが転勤になっちゃって。本当だったら単身赴任でも良かったかもしれないんだけど、やっぱり家族みんな一緒がいいねって話になったから。ごめんね」
母は呆然と立ち尽くしたままの僕をなだめるように優しい声でそう言った。
イヤだ。僕は物心ついた時からこの町で暮らしていたのだ。今更他のところになんて、行きたくない。この町に住んでいたい。
…でも僕は、自分が今更何を言っても決まってしまったものは変わることはないということがわかっていた。しょうがないんだ。受け入れるしかない。だから、イヤだと怒ったり、泣いたり、騒いだりすることはしなかった。僕は祖母に促されるまま、もう一度椅子に座り直した。

「…この話が決まったのはな、一週間以上前のことなんだ。でも星汰に言うのが申し訳なくて、ずっと言えずにいた。だから星汰が父さんたちの態度に異変を感じていたこともうすうすわかっていたんだ」

父の言葉を聞いて、父たちの態度が変わったことにはこんな理由があったのだとわかると、パズルの最後の一ピースをはめた時のように今までのむずむずした気持ちから一変、少しすっきりしたような感じを味わった。

「…わかった」

そう一言だけいうと、僕は頭の中を色々整理したくて、一度部屋に戻ることにした。

僕はベッドに座り込んで考えた。引っ越すのか…友達は、またつくればいい。高校も、新しい環境に慣れてしまえばこっちのものだ。そう考えれば引越しなんて、なんてことない気がする。ただひとつ…『山』はどうなる。都心の方に引っ越すとなると、星はともかく、天の川なんてみることはできない。星を見ることが好きだった僕にとって、空を見あげればすぐに星が見える環境がないことは何よりも辛い。そして、このみと一緒に星空を見上げることもできなくなるのだ…僕が引っ越すと聞けば、このみは悲しむだろうか。もしくは、ふーん。としか思わないだろうか…

そんなことを考えているうちに、祖母が部屋に入ってきた。

「星汰。いまから『山』に行かんか？」

突然の祖母の申し出に一瞬ためらったが、僕は祖母について行くことにした。

6.

僕は今、祖母と二人で『山』の頂上への道を登っている。ここに来たのは去年の七月、このみと会って以来だ。

あれからも、今まで通りこのみとはあまり喋ったりはしなかった。学校の廊下ですれ違えば、軽く挨拶する程度にはなったのだが。

坂道は祖母にとってはきついらしく、心無しか普段僕が登るよりもペースが遅いように感じた。

祖母とは、初めは同じ町の別の家で暮らしていたが、祖父が他界したことをきっかけに同居するようになった。僕が三歳くらいの時だ。その時もよく祖母と二人で『山』に来て星を眺めていた。祖母から星の話を色々としてもらい、僕は物心ついた時から星に詳しくなっていて、星が大好きになっていたのだ。僕がこのみに話していた「星に関する知識」は、実は祖母から教えてもらったものがほとんどだった。

そんな、僕が星好きになるきっかけとなった祖母とは、今では頻繁に話すことはなくなっていた。祖母と二人で『山』に行くのなんて、下手をすれば幼稚園以来かもしれない。

そうこうしているうちに、『山』の頂上に着いた。祖母と僕は並んで腰掛け、しばらくお互い黙って空を見上げていたが、僕からしたら、祖母は僕にどんな話をしたくて『山』に誘ったのか気になって仕方なかったので、祖母が話しだすのを今か今かと待っていた。しばらくすると、祖母は空を見あげたまま

「今日は晴れているから星が良く見えるねぇ」と口を開いた。

僕は「うん」と答えた後、「なんで今日、僕を『山』に呼んだの？」と聞いた。

祖母は間を置いてから、ゆっくり口を開いて、

「なんでお前に、星汰っていう名前がついたか知ってるかい？」

と聞いた。

確かに、僕は親から自分の名前の由来を聞いたことがなかった。僕が「ううん」と答えると、祖母はまた、ゆっくりと話し出した。

「私も子供の頃は、この『山』に毎日のように遊びに来て、よく星を眺めてたんだよ。もちろん、七夕には天の川は今よりもっと綺麗に見えたし、星も今と変わらず綺麗に見えた。ここで見た星空に感動した事がきっかけでどんどん星に興味が湧いてきて、気づけば誰よりも星に詳しくなっていたんだよ」

星が好きになったきっかけが僕と全く同じであったことに驚いた素振りを見せると、祖母は微笑みを僕に向けてから話を続けた。

「私とおじいちゃんのあいだの子供…つまり、星汰のお父さんにも星が好きになって欲しいと思って、小さい頃『山』によく連れて行って星を見せたりしたんだけど、あまり星汰ほど星に興味を持ってくれなかった。だから、今度こそ星汰には私と同じように星が好きになって欲しいという願いを込めて、そしてこの『山』から見た星のように今も昔も変わらず美しく、輝ける人になってほしいという意味で『星汰』っていう名前に決めたんだよ。だから、この『山』は星汰の名前をつけるきっかけにもなってるんだ」

初めて聞いた僕の名前の由来は、僕が思っていたものよりもはるかにすごいもので、祖母たちが僕に様々な願いを込めてつけてくれたものなのだと思うと今更だが嬉しくなった。…もっとも、今まで自分の名前にそんなにも深い意味が込められているとは思ってもみなかったのだが。

祖母は、ここからが本題というような顔で星汰の方に向き直すと、こういった。

「都心部に引っ越すから、星もあまり見ることができないし、何よりこの町を離れることによって『山』に来られなくなってしまうのは星汰にとって何より辛いことだと思うよ。でもこうして話すだけで、またいつでもこの場所のことを思い出すことができるし、ここで見た星空のことも…天の川のことも思い出すことが出来るから、大丈夫だよ。また本当にこの場所に戻ってきたくなったら、電車やバスでも車でも何でも使って遊びに来たらいいさ」

祖母がいうことの一言一言を噛み締めると、僕の中でようやく「引っ越す」という言葉がきちんと受け入れられたような気がして、でも自分がその事実を受け入れざるを得なかったということが悲しくも悔しくも感じられ、よく分からず自然と僕の目からは涙がこぼれ落ちていた。恥ずかしい。引越し如きで中三にもなって泣くとは。こんなところをこのみや他の友達に見られたら…僕は周りにいるは

ずもない友達を意識しながら、祖母から顔を背けて声を出さないように泣こうと頑張っていたが、もういいやと諦めがついてそれらのことを気にせず泣いた。

祖母はそんな僕をどんな思いで眺めていたのかわからないが、優しい顔をして僕の方を見てから、再び星空を見上げた。

しばらく経って泣き止むと、僕も祖母と同じように上を向いた。

四月の終りといえども、まだ夜は肌寒い。涙で濡れた顔に涼しい風が気持ちよく、体全体がひんやりとしたような感じがした。

「じゃあ、そろそろ帰るかね」

僕が泣き止むのを待ってくれていた祖母は、僕の顔を見るとゆっくりと立ち上がった。僕も祖母に手を引いてもらい静かに立ち上がる。

下り坂は祖母にとっても苦ではない。僕と祖母は、二人で肩を並べて、それぞれ星のことや引越しのことなどおもいおもいのことを考えながら坂を下って行った。

7.

今日は、七夕だ。去年星汰と偶然『山』で会ってから、もう一年も経ったのだ。今年も星汰が『山』にいるかもしれないから、今日も行ってみようか、なんてことを考えながら私は学校への道を歩く。

「おはーこのみ！」

後ろからいつものように、千鶴が声を掛けてきた。

「やっほ！　あ、そうそう！昨日千鶴が言ってたあのテレビさー…」

私たちのおしゃべりに一気に花が咲く。中学校生活三年のうちずっと千鶴と一緒にいると、誰よりも気のおけない友達になっていくものだ。

千鶴と私が学校に着き、それぞれの席についたところで、クラスのある女子が「話があるって言ってる人がいるんだけど…」と私に声をかけてきた。何だと思って不思議そうに千鶴の方を見ると、「告白じゃない？がんば！」と冷やかすような口調で言ってきたので、

「おっけー。頑張るわ」と適当に返して、その女子が促す場所に向かった。誰が呼んでいるのだろうと見ると、そこには星汰が立っていた。
「…星汰！どうしたの？！」
「あーごめん。大事な話があるから、今日学校終わったら『山』に来て」
私の驚いた様子を無視したように星汰はそれだけいうと、「そんじゃ、あとでね」と手を軽く挙げ、くるりときびすを返した。
「あっ…」
行ってしまった。やっぱり学校で見る星汰はなんとなく冷たいような、私との馴れ合いを避けているような、そんな感じがした。
教室に戻ると、千鶴が真っ先に声をかけてきた。
「どうだった？？　何の用だったの？」
「あー。なんか…星汰」
「えっ星汰って…他のクラスのこのみの幼馴染みとかいう人？」
「そうそう」
私たちが話しているうち、担任の先生が入って来たのでおしゃべりは中断された。
その後、授業中も星汰のことが気になって仕方なかった。星汰…大事な話ってなんだろう。色々と考えているうち、気づけば放課後になっていたので私は千鶴に別れを言ってから『山』への道を急いだ。

8.

家に立ち寄らず、急いで『山』に向かうと、もう既に星汰は到着していた。
「遅くなってごめん。星汰、話ってなに？」
「こちらこそ、突然呼びつけてごめん。あの、大事な話で、このみには聞いておいて欲しいと思って」

この時の星汰の様子から、だいぶ深刻な話なのだということは私でも悟ることが出来た。
早く話の内容を聞きたいと思ったが、ここで星汰に早く話すように急かすのはあまり良くないと思ったので、星汰が自分のタイミングで話し出すのを待つことにした。
「あの。驚かないで聞いて」
ようやく星汰が話し出したと思うと、こんなことを言われたので、私は思わず身構えた。
「僕、中学卒業したらこの町を引っ越して、都心の方の街に住むことになった。親の転勤で」
星汰にこう打ち明けられた時は、現実が受け入れられずに固まってしまった。
ひっ、こ、す…
その一文字一文字が私の中でようやく受けいられた時、私は驚きのあまり「えーーーーーっ！　！」と声を出してしまった。驚かないで聞いてね、と言われたばかりなのに。
星汰はそんな私の様子を悲しそうな目で見ながら、
「本当は父親だけ行く予定だったんだけど、やっぱり家族みんながいいっていう話になって」
と続けた。
星汰が引っ越すなんて、そんなこと考えられない。昔から仲良くしていて、今はあまり話さなくなったといえども私のたった一人の幼馴染みで、去年の今日だって二人で並んで星を見たりして…ありえない。
一瞬泣きだしそうにもなった。でも私以上に星汰の方が辛いんだと考えると、私が泣くことはできない気がしたので、私は精一杯、
「さみしく…なるね…」
とそう一言だけ言った。
星汰は「うん…」と答えると、黙ってその場にしゃがんだので、私も星汰の横に座った。

「僕が引っ越すことで何より辛いのは、この『山』に来れなくなること。それとあともう一つ…このみと一緒に星を見ることが出来なくなること」
「……！」
星汰がそんな風に思ってくれていたのだ。驚いたと共に嬉しさのあまり後ろにのけぞってしまった。
「ほんと？　嬉しい…。星汰がいなくなるのは本当に寂しいけど、私は星汰が引っ越した後も星汰のことは忘れないし、九年前に二人で見た綺麗な天の川も、去年ここで偶然会って、二人で弱く光る星を見つけたことだって絶対に忘れないから。だから、星汰も私のことを忘れないでいてね…」
星汰の手を握ったまま一気にいうと、色々な感情が沸き起こってきて、先ほど我慢した涙が一気に溢れた。気づけば私は声を上げて泣いていた。
悲しい。星汰がいなくなってしまうなんて…だけど泣いてはだめだ。星汰を困らせてしまい、また悲しい思いにさせてしまう。でも次々に流れ出る涙は止めようと思ってももうどうにもならず、そのままずっと泣き続けるしかなかった。
私が泣いている間、星汰がずっと私の手に自分の手を重ねていてくれたことは後になって気づいた。
私がようやく泣きやんだ後、星汰は優しい声で、「空、見てみて」と私に言った。泣いていたので気づかなかったが、あたりは気づけば暗くなっていた。言われるがまま空を見上げると、そこには星がびっしり、きらきらと輝いていた。
「ほら、あっちの方を見てよ。天の川が見える！今日は晴れていたからね。…九年ぶりに、二人で天の川を見ることが出来た」
星汰が指さす方を見ると、確かにそこには、天の川が見えた。
「きれい…」
泣いた後に見る天の川は、目がすっきりしていて九年前に見たものよりも綺麗に、はっきり見えた気がした。

「織姫と彦星は、毎年七月七日になれば、天の川にカササギが橋をかけてくれることによって再会することが出来るんだよ。僕も毎年七夕の日は、この『山』へこのみに会いに行くから。待ってて」
星汰がこんなことを言ったから、私は嬉しくてたまらず、もう一度泣きだしそうになった。どうにかこらえて精一杯「うん…！」と返事をすると、こう言わずにはいられなくなった。
「私、星汰のこと、織姫が彦星のことを好きなのと同じくらい、好きだから。来年も、再来年も、ここに会いに来なかったら怒るからね」
私の言葉を聞いて星汰は今まで見たことがないくらいの笑顔で
「うん」
と大きく頷いた。
「じゃあ、帰るか！」
星汰はそう言って立ち上がって、私も後に続いた。星汰が引っ越すと聞いた時の悲しい気持ちが嘘のように、今は、すっきりした晴れやかな気分になっていた。
坂を下っていく私と星汰の背中を、ベガとアルタイルが空からきらりと輝いて見守った。

エピローグ
今日は、三月二十五日。私たちの中学校の卒業式の日だ。冬の寒さはまだ残っているが、空はよく晴れていて、絶好の「卒業式日和」だった。
制服をぴしりと着て式に臨み、式が終わるとそれぞれお世話になった先生や友達のところへ駆け寄り挨拶をする。
「このみ！　元気でね！」と、別々の高校へ進む私と千鶴は一緒に写真を撮ったり思い出話をしたり、別れを惜しみあった。仲が良かっただけに、別れるのはつらい。
担任の先生にも声をかけ、千鶴以外の友達にも挨拶を済ませ、さぁ帰ろうとした時、人だかりのなかに星汰の姿を見つけた。

皆、星汰がこの町から引っ越すことを聞いたのだろう、男友達をはじめ沢山の人が「引っ越した先でも頑張れ」などと声を掛けていた。

星汰はこの後すぐに、この町を発つらしい。星汰たちのお見送りをするから早く帰って来いと母から急かされていたので、私は急ぎ足で家に帰った。

帰ると、姉と母が準備をして待っていた。

「このみ、卒業おめでとう。この後すぐにお見送りに行かなきゃだから、急いで昼ご飯食べちゃいなさい。…あと、卒業式行けなくてごめんね」

母はそういうと、私の頭を撫でてから、星汰の母親に電話をかけに行った。

私と姉と母の三人が星汰の家の前についた時には、もう既に荷物は全て積まれていて、いざ出発、というような状態だった。車の後部座席に乗っていた星汰は、私の姿を見ると、シートベルトを外して車から降りてきた。

「この前の七夕に約束したこと、覚えてる？毎年七夕の日に、『山』で会うってこと、忘れないでよ」

星汰はそう言うと、私の手にさらっと、星の飾りがついたネックレスをおいた。「これが、僕たちの約束を示すものだから。じゃあね」

星汰はそれだけ言って、もう一度車に乗り込んだ。それと同時に、星汰の母親が私の母への挨拶を終え、出発を知らせる声が聞こえた。

「星汰…いままで、本当にありがとう。また、七月七日に『山』で会おうね！　このネックレスも…大事にするから！」

私がこう言い終わるかどうかのうちに、車は走り出してしまった。

でも、今の声はきっと星汰に届いたと、私は信じている。

私と星汰が再び会う場所、それが『山』なら、そこが二人にとっての「天の川」になるのだろう。私は笑顔で姉の方を向き、

「あの…随分前にお姉ちゃんが言ってた話…私と星汰が織姫と彦星みたいだっていうこと、どうやら本当にそうみたい！」

と明るい声で言ってから、星のネックレスを握りしめ、家への道を一人、駆け出した。

おわり